

資料

I ベールのスピノザ像

Pierre Bayle, *Écrits sur Spinoza*, publié avec le concours du Centre National des Lettres,, Paris 1983. Textes choisis et présentés par Françoise Charles-Daubert et Pierre-François Moreau.

2) 『歴史批評辞典』におけるスピノザの項

\* 無神論者

「ユダヤ人に生まれ、次にユダヤ主義の離脱者となり、最後にアムステルダムの無神論者となった。彼は体系的で全く新しい方法の無神論者(un athée de system et d'une méthode toute nouvelle)である(同、21)。

注 A:「無神論を体系に還元し、幾何学的方法に従って結合され折り合わされた学説の体系(un corps de doctrine lié et tissu)をこれから作った最初の人間」(32)

\* 良心の強制の拒否 ベールの良心論に関連

「良心の強制(contrainte de la conscience)を好まず、隠蔽の偉大な敵 (grand ennemi de la dissimulation) である人間」であった(同)。

\* 『神学政治論』について

「有害でひどい書物(livre pernicieux et détestable)。「彼はこの書物の中に遺稿集で見いだされる無神論の全ての種を紛れ込ませた。」(22)

注 D においてベールは、『神学政治論』に関するオランダにおける論争を紹介するが、自己の見解を述べないままである。さらに注 E では「人が宗教を考案したのは、人間たちを徳に専心させるためであり、別の世界における報酬のためではなく、徳がそれ自体で卓越的であるためである」との見方はスピノザの宗教観ではないと指摘する。ベールによれば、宗教の有用性は「この生の後に外的かつ内的な人間の行為を罰しこれに報う不可視の審判がいる」ことから生じ、「この生の後の苦痛と報いを提示する」(46)ことが宗教を創始する動機である。ベールはスピノザもこれと同じ宗教観であったはずと主張する。しかし、他方では、徳に関連して「エピクロス主義者のように魂の不死性と摂理を否定する人々は、徳の卓越性(excellence)のゆえに、そしてこの生に人が良き道徳の実践に十分な長所を見いだすゆえに、徳に専心すべきであると主張する人々である。もしも、スピノザが公共的に(publiquement)にあえて教義化したならば、彼は疑いもなくこの教説を示したであろう」(47)と書き、スピノザ思想における徳の重要な役割を認めている。

注 M でベールは宗教における良心、感情の役割を強調する。「1. 理性の光はそのことが虚偽であることを私に教える。2. しかし、私はそれを信じる。というのも、この光が無謬ではないことを私は確信しており、形而上学的論証よりは感情の証明、良心の印象、一言で言えば神の言葉に従いたいからである。「M. l'abbé Dangeau は精神の中(dans l'esprit)に宗教を持つが、心には(dans le coeur)宗教を持たない人々について語る。彼らは、その良心が神の愛に通じることを知らずに、真理を確信している。私が思うに、宗教を心(dans le cœur)にもつが、精神に持たない人々もいるとあって良い。人間の推論の方法によって彼らは宗教を探究しようとして宗教を失う。宗教は、弁証論の些末と詭弁に逃れる。彼らは、賛成と反対を比較している間には自分がどこにあるかを知らない。しかし、彼らが論議をやめ、感情の証明、良心の本能、教育の重みに耳を貸すと、すぐに彼らは宗教を確信し、人間の不安定さが許容する限り、自分の生をこれにあわせる。」(59)

\* 真理探究のために世間を捨てる

スピノザは「デカルト氏の体系に利益を見いだした。彼は真理を探究するきわめて強い情熱を感じ(F)、この探究により励むために世を捨てた。」(22)

\* 死後の評価 人物像

「彼は慢性病(une maladie lente)で倒れた。この病のために、彼は1677年2月21日、La Hayeで死去した。彼と交際があった人々、村の農民たちは一致して次のように言った。彼は、un homme d'un bon commerce, affable, honnête, officieux et fort réglé dans son mœurs である(I)。これは妙で(étrange)ある。しかし、根本においては、福音について十分な確信を持ちながらきわめて誤った生をおくる人々を見るのと同じほど、これについて驚く必要はない。」(23)

注 I 「彼は研究だけを考え、夜の大半をそのためにすごした。彼の生活は真の孤独者の生活であった。・・・彼が時に重要な人物を訪問したことも本当である。それは・・・国家事(des affaires d'Etat)

について推論するためであった。」(52)

### \* 「エチカ」における実体概念

「これは創造可能な最も途方もない仮説であり、最も不合理で、我々の精神の最も明証的な諸概念に最も正反対である」

注 N 実体概念と悪の問題「スピノザによれば、人が罪にかかわる悪、苦しみに関わる悪、身体に関わる悪、道徳に係わる悪と呼ぶすべてのものに関して、神以外には主体(agent)も受動主(patient)もない(60)」。

1) 「宇宙が唯一の実体であることは不可能である。というのも、すべての延長的なものは必然的に諸部分を有し、諸部分を有するものは複合されているからである。(60)

変様：「二本の樹が延長の二つの部分ではなく二つの変様であると彼は教えた。・・・主要な柱の一つは部分という言葉と変様という言葉の間の相違であるに違いない。・・・物質を諸部分に分割するときよりも、物質を諸変様に分割するときの方が、相違のある印あるいは文字の実在性が減少する、あるいは明証性が減少するのか。・・・物質の観念は、複合された存在の観念、いくつかの諸実体の固まりの観念であり続ける(62)。

様相：「様相(les modalités)はそれが変様させる(modifier)実体なしにはありえない存在である。したがって、様相があるところ、至る所に実体がある。したがって、両立しない(incompatibles)変様が増加する(se multiplier)に応じて、実体は増加するにちがいない。」

2) 神を延長的にすることは不合理である。というのも、これは神からその単純性を取り去り無限数の諸部分から神を複合することである。

3) スピノザの神を思考のすべての変様の主体であると考察することによって、我々はいっそう奇怪な不合理性(des absurdités encore plus monstrueuses)を見ることになる。延長と思考を唯一の実体の中で結合することは、すでに大きな困難である(65)。

「スピノザの体系においては、矛盾する用語は彼が神と呼ぶ唯一で不可分の実体に合致する。同じ客体に関して欲する行為を行うのも欲する行為を行わないのも神である。したがって、神に関して矛盾する用語が確認される。これは、形而上学的第一原理の破壊である。」(66)

4) 単純で唯一の主体がすべての人間の思考によって同時に変様されるというのは、自然的には異常な不合理性であるので、これを道徳の側面から考察するとき、これは最悪の嫌悪(une abomination exécrable)である。何がそうなのか。・・・神はそれ自身のうちに人類のすべての狂気、夢想、卑劣、不正を産出するであろう(68)。・・・人間たちは同じ存在の変様でしかないのだから、活動する神、トルコ人に変様しハンガリー人に変様する数的には同じ神(le même Dieu en nombre)があるので、戦争と戦闘がある。これはすべての怪物と施設に幽閉されなかった気の狂った頭脳の妄想的無軌道をこえていく。様態(les modes)は無であり、活動し受動するのは実体だけであることに注意せよ。蜂蜜の甘さは言語を刺激するというフレーズは、蜂蜜を構成する延長的実体が言語を刺激するとそのフレーズが語る限りで真実である。スピノザの体系においてはドイツ人が一万人のトルコ人を殺害したという人々は、彼らがドイツ人に変様した神が一万人のトルコ人に変容した神を殺害したとは理解しないかぎりで、誤って語っている。人間を相互に対立させることを表現するすべてのフレーズは、以下のこと以外に真の意味を持たない。すなわち、神は自己を憎む、神は自分への恩恵を求める、この恩恵を拒否する。彼は自分を攻撃する、彼は自分を殺す、彼は自分を食する、彼は自分を誹謗する、彼は自分を死刑台に送る、等等。・・・彼は、考えられるもっともおぞましく狂ったような法外さ(les plus infames et les plus furieuses extravagances)を提供する(69)。

5) 神性を悲惨に帰着させるのはおそらくスピノザ主義者だけである。どのような悲惨さか。絶望し、可能であればなくなるほどの悲惨さである。・・・人間が変様でしかないなら、彼は無である。喜びは楽しい、悲しみは悲しいと言うことは、不作法で道化的で滑稽なフレーズとなろう。」(71)

6) 「通常の哲学者たちの思想、ユダヤ人の思想、キリスト教徒の思想は、無限な存在の様態であり彼のエチカの様態ではないのか。それらは、宇宙の完全性と彼の全思弁の完全性のために必要な実在性ではないのか。したがって、彼はなぜ正すべきものがあると主張するのか。」(72)

### 3) 有徳な無神論者『彗星雑考』

Pierre Bayle: Pensées sur l'athéisme, Présentation de Julie Boch, Paris 2004.

### \* 反復される無神論の主題

Lettre sur la comète(1682), Pensées diverses sur la comète(1683), L'Addition aux Pensées diverses(1694), Continuation des Pensées diverses(1704), L'Éclaircissement sur les athées(1704), la Réponse aux questions d'un provincial(1703, 1705, 1706, 1707)

Pensées diverses sur la comète(1683)

\* 偶像崇拜と無神論

「神は偶像崇拜を維持することによって無神論を根絶することも、無神論を導入することによって偶像崇拜を根絶することも奇跡の目的とすることはできなかった(57)」

「偶像崇拜者が誤った説教を行い、寺院を掠奪し、自分たちの神々に気に入らないとわかっている他の行為を行うことは、無神論者が同じことを行うことよりも大きな罪である(63-64)」。

\* 宗教ではなくて人間的諸法が退廃を抑制する

「宗教以上に強い抑制、すなわち人間的な諸法(*les lois humaines*)が社会の退廃(*leur perversité*)を抑制しなければ、両者とも社会を形成することはできないであろうこと、これは明らかである。このことによって、摂理の曖昧で混乱した認識が人間の墮落を減じさせるに有効であると言う根拠がないことがわかる(74)」。

「人間の諸法が多くの人々の徳をつくる (93)」

\* 人間の真の動機

「無神論が人の陥る最も嫌悪すべき状態であると我々に確信させるのは、良心の光(*les lumières de la conscience*)について形成される誤った偏見にすぎない (78)」。

「むしろこの世界で人は良心の光に従って振る舞わないと宣言するであろう(80)」。

「人間が特定の行為へと自己決定するのは一般的知識ではなく、行為するときに彼がそれぞれの事柄について抱く特殊な判断による。ところで、この特殊な判断は、なすべきことについて人のもつ一般的諸観念に一致しうるけれども、最もよくあるのは一致しないことである。彼は、ほとんどいつも心の支配的感情、気質の性向、こわばった習慣の力、人がある対象の抱く好みあるいは感受性に合わせる(81)」。

「人間の諸行為の真の原理が、気質、快への自然的傾向、あるものへの好み、或人に取り入る欲望、友人たちとの交際においてえた習慣、我々の自然の根本から帰結する他の傾向でしかないこと」(83)

\* 事実の真理対形而上学的推論

「我々は、地獄を恐れ良心の呵責があるにもかかわらず、人間たちを罪へと引き込むこの種の精神がなお至る所で支配していることを見る。したがって、私の主張に反論することは事実の真理に形而上学的推論を対置することに他ならない(86)」。

\* 無神論者の道徳性

「交際において誠意を持ち、貧者を援助し、不正義には反対し、友人たちに誠実で、侮辱を軽蔑し、身体的欲望を放棄する人々が彼ら(無神論者たち：中河)の中に見いだされる」(94)。

「神の認識を欠く人々が誠実さの諸規則(*des règles d'honneur*)及びこれを守る繊細さ(*une grande délicatesse pour les observer*)を心に抱く」(95)

「自然はキリスト教徒たちの中で作ることを無神論者たちの中で作る。無神論者たちの中では福音の知識が自然をはばむことはない(95)」。

\* 有徳な無神論者

「有徳に生きる無神論者とは奇妙な事柄であり、これは自然の諸力を凌駕する怪物である。無神論者が有徳に生きることは、キリスト教徒があらゆる種類の犯罪を犯すこと以上に奇妙なわけではない。我々が後者の種類の怪物を日々見るならば、我々は他方が不可能であるとなぜ信じるのか(97)」。

「無神論者には神が十分に自己を啓示しないにしても、神は彼の精神に働きかけ、全ての人間がそれによって形而上学と道徳の最初の諸原理の真理性を把握する理性と知性を彼のために維持する(106)」。

### L' Addition aux Pensées diverses(1694)

\* キリスト教的党派の不寛容

「これら諸党派(全てのキリスト教的諸党派)は彼らにとって寛容が必要な国々では寛容を説き、自分たちが支配的な国々では不寛容を説く(125)」。

\* 理神論

「ジュネーヴでは理神論者たちの信心会よりもイエズス会の人々の同僚の方を恐れるであろう。理神論者たちにとっては、全ての宗教は正しい(126)」。

### Continuation des Pensées diverses(1704)

\* 無神論者の社会的結合

「独立した諸家族に分割された無神論的人々はアメリカでは昔から法なしに維持されている。

従って、彼ら全てが共通の支配者と苦痛と報酬を配分する法典の下で再結合したとしても、彼らは自己を維持したであろう(142)」。

エピクロス主義者：「彼らは、無益な神々との関係ではなく、ただ理性の光の中だけに諸義務の諸観念を見いだした(147)」。

スピノザの道徳：「かつて教えられたことのない無神論と同時に誠実な人間の諸義務に関するきわめて

多くの良き諸格率」(147)

\*無神論

「自然は全ての諸事物の原因である、自然は永遠にそれ自身で存在する、それは自分の知らないその諸力の広がりとは不動の諸法則にしたがって常に動く。ここから、それが作るものだけが可能であり、それは可能なものすべてを産出する。人間たちのどんな努力も諸帰結の連鎖において何も変えることも乱すこともできない。全ては宿命的で不可避の必然性により起こる。どんなものも他のものより自然的であるのではなく、宇宙の完全性により一致しないというのではない。世界がどのような状態にあらうと、それはあるべきようにあり、ありうるようにある(153)。・・・最後に、それは人が悪い品行と呼ぶものに苦痛を与えず、徳と呼ぶものに報償を与えない(154)。」

\*理性との合致

「三段論法の諸規則に反する仕方では推論すれば欠陥であるように、意志の諸行為の諸規則に合致せずにあることを欲すれば欠陥である。これらの諸規則の中で最も普遍的なものは、人間は正しい理性に合致するものを欲すべきであり、これに合致しないものを欲すれば常に自分の義務から離れること、これである。理性に合致すること(*se conformer à la raison*)は理性的被造物にふさわしく、理性に合致しないことは理性的被造物にはふさわしくない、このように語る以上に明証的真理はない。したがって、父親を敬うこと、契約の諸条項を守ること、貧困な人々に援助すること、感謝の念を抱くことなど、これらが理性に合致すると知る人間は全てこれらのことを実行する人々は賞賛すべきであり、実行しない人々は非難すべきであると知るであらう(159)。」

## DE LA TOLÉANCE

Pierre Bayle, *De la tolérance*, édité par Jean- Michel Gros , Paris 2014.

\*自然の光、自然法、福音

「思弁的諸真理に関してある諸制約がありうるとしても、*mœurs* に関する実践的で一般的な諸原理に関しては制約があるはずとは私は考えない。私が言いたいのは、全ての道徳的諸法は *cette idée naturelle d'équité* に例外なしに服従すべきであるということである(89)。」

「あらゆる場所及びあらゆる時に我々に伴い、全体が部分よりも大きいことを我々に示す生き生きとして判明な光は、恩人に感謝し、自分がして欲しくないことを他人にせず、約束を守り、良心に従って行動するなど、誠実である(93)。」

「全ての特殊な教義は、それが聖書に含まれているとして提出されようと、別のよう提起されようと、自然の光の明晰判明な諸概念によって、主に道徳に関して否定されるならば、誤りである(95)。」

「福音は正しい理性の純粋な諸観念により確証された規則であり、これら純粋な諸観念は全ての真理と正しさの原初的でオリジナルな規則(*la règle primitive et originale de toute vérité et droiture*)である(103)。」

Antony Mackenna

「この 20 年来ベール研究が古典的な時期の哲学的かつ宗教的諸観念の歴史におけるピエール・ベールの位置を大きく変えた」という。ベールは「寛容の思想家」として「デカルト、ホブズ、ガッサンディ、マルブランシュの偉大な諸体系の歴史の執念」におかれた。人がベールに課す要請から、「懷疑主義に等しく基づく寛容のコンセプト」を演繹し、「懷疑主義と寛容」が「同一の哲学的要請の二つの顔」とされた(5)。

「最近の諸研究はベールの道徳の合理主義にアクセントを置いた(5)。ベールはこれをマルブランシュの諸著作で発見したようである(5-6)。この合理主義は彼の最初の諸著作で表現さる。M.は『哲学的注解』から、*illumine tout homme venant au monde*、「自然の光あるいは形而上学の光の諸公理」『哲学的注解』(第一部第一章)を引用する。問題は、寛容が懷疑主義ではなく、合理主義から由来するかである。M.は後者の立場である。「他者の信仰を侵害し、力で内的確信を放棄させ、良心の声に反対させる誘惑」は「合理的で自然的な道徳の基礎的原理」に反する。さらに M.は「理性の明証性」が「聖書の真正性」の判断の基礎になると指摘する(6)。

「したがって、合理的で自然的な道徳が福音的道徳への賛同の基礎となる。」自分が欲しくないことを他者に行うなどの福音の掟を自然の光が権威づける。ベールは寛容の学説を懷疑主義ではなく万人に明証的な自然法から導き出す(8)。」

「ベールの寛容論の中心である *les droits de la conscience errante* は、人間の認識の不確実性からではなく、良心に従うという義務、「各人の自然的義務と権利(*des devoirs et des droits naturels de chacun*)」から派生する。良心の自然権に化せられる唯一の制約は公共の秩序の制約であらう(10)。」

こうした合理主義の故に M.は今日の資料ではベールが「観察者(*observateur*)」から「当時の哲学的、宗教的、政治的論争における主要な行為者」に変わった。

Julie Boch

「この世紀の末のコンテクストでは、ユグノーの主要な脅威はカトリシズム、迫害への恐れからのプロテスタントの改宗ではなく、純粹で単純な理神論に類似する合理主義の誘惑である。Les Pensées diverses はそれ以後その疑いがかけられる(8)。」

「La Continuation のなかで彼が引用する Grotius と Pufendorf の善の理性的認識に基づく自然法の観念を継承し、ベールは利害と自己愛の動機のない、完全な道德性を無神論者に与える(23)。」

「道德と宗教との独立性を主張することに加えて、この哲学者は宗教が道德を滅ぼすと断言する(24)。」

「ベールにとっては、無神論者になるためには神の存在を否定する必要はない。無神論的思考の真実の台座となるのは、地上の出来事を支配し賞罰を与える摂理の介入への 信仰の拒否である(26)。」

「ベールが無神論的体系を正確に確立するのは、la Continuation からである(27-28)。」

「キリスト教神学以上に充分に、無神論は地上における悪の存在の理由を与える。ここでは、どんな弁神論も不可能であることがキリスト教を不合理と宣告する。・・・これと同じく、宇宙の組織の超越的原因を求めない、宇宙の無神論的概念は、被造物に神が宣告する惨めな現実に矛盾する善良な神の首尾一貫性欠如によって問題とされることはない(29)。」

「確実であることは、人間の条件の悲劇的な現実が遠い神の至高の温かさ(la souveraine clémence de Dieu lointain)への信仰を動揺させたこと、そして彼がひとつのことを確信し続けたことである。すなわち、現にあるような世界の悪は、無神論を擁護するより強力な論証のひとつである(31)。」

Jean-Michel Gros

「事実、今日ベールを読むことは疑いもなく緊要になっている。多くの人々がイデオロギーの死としてきわめて無分別に捨てたものと共に開かれた時代では、良く思考するものが戦いもなく勝利し、最も偏向した確信が検証もされずに支配し、最も残酷なファナティズムが我々の社会を死滅させる。我々の時代は意図することなくあらゆる形式の良心の操作に直面し、理不尽さ(impertinence)への感覚を喪失し、極端な脆弱性に曝されている(7)。」

II ドイツ汎神論論争とスピノザ像をめぐって

\* 「第二のスピノザ」

「第二のスピノザ」としてのメンデルスゾーン (レッシング、1754年10月16日付 Johann David Michaelis 宛書簡)

メンデルスゾーン

Moses Mendelssohn, Morgenstunden oder Vorlesungen über das Dasein Gottes, in: Schriften über Religion und Aufklärung, hrsg.v. Martina Thomm, Darmstadt 1989.

\* ヤコービ：スピノザ主義＝宿命論＝無神論

ヤコービは、「われわれの友人 Gotthold Ephraim Lessing、断片の出版者、ナータンの著者、den großen bewunderten Verteidiger des Theismus und der Vernunftreligion)を、「スピノザ主義者、無神論者、Gotteslästerer」として告発する(文献2、476)。

レッシング、ライプニッツ、ヴォルフ、その他の形而上学的論証者とともに、「決定論者、ヤコービの概念によれば宿命論者、スピノザ主義者したがって無神論者」になりたくなければ、あるいは「極端な懐疑主義者」に身をゆだねたくなければ、「闇を照らす光り」に従うべきである。「どんな証明も(jeder Erweis)もすでに証明されたことを前提とする。この原理は、啓示である。」(同、485)

ヤコービによれば「スピノザ主義は無神論である」。しかし、「ライプニッツとヴォルフの哲学もスピノザ主義哲学と同じように宿命論的であり」、「スピノザ主義の諸原則に連れ戻す」。「論証のどんな道も宿命論に帰着する」。しかし、レッシングは「論証の道」を辿り、「理性をある程度信頼した人々」に属する(同、509)。

\* メンデルスゾーン：浄化されたスピノザ主義

「浄化されたスピノザ主義(Ein geläuterter Spinozismus)がある。これは宗教および倫理学の実践的事柄と融和し、おもにユダヤ教と合一しうる。スピノザは、その思弁的教説にもかかわらず、真正なユダヤ教徒でありえたであろう。スピノザの学説は、キリスト教徒の正統的教理よりもはるかにユダヤ教に近い。」(同、478)

\* メンデルスゾーン：素朴で健康な人間悟性

ユダヤ教(Judentum)も「諸教説と永遠の諸真理の啓示」ではなく、「礼拝についての啓示された諸法

則(geoffenbarte Gesetze des Gottesdienstes)」に存し、「宗教諸真理についての自然的で理性的な確信(natürliche und vernunftmäßige Überzeugung von Religionswahrheiten)」のみを前提する。(同、487)  
「素朴で健康な人間悟性の発言と判断(Aussprüchen und Urteilen eines schlichten gesunden Menschenverstandes)」(同、487)

2) スピノザ像(死んだ犬)の転覆 ヘルダーによるロマン主義的スピノザ受容

Herder's Werke, 18. Teil, herausgegeben und mit Anmerkungen begleitet von Heirich Düntzer, Berlin, Gustav Hempel.

#### \* 「一にして全」

1784年2月6日、ヘルダーはヤコービに返事を書き、「私が哲学において夢想して以来、いつも次のレッシングの命題の真理性に気づいてきた(文献4, S.VI)。すなわち、本来スピノザの哲学のみが哲学自身と一致する。」そこで、「私の意見では、スピノザが死去してから誰も一にして全(ヘン・カイ・パン)の体系を公正に扱わなかった。メンデルスゾーンすらスピノザに関する対話においてそうである。」(同、VII)

#### \* スピノザへの先入見

『神』にある対話の冒頭では「無神論者かつ汎神論者であり、盲目的必然性の教師、啓示の敵、宗教の軽蔑者、したがって国家と市民社会全体の敵、したがって国家と市民社会全体の破壊者、つまり人類の敵」であり、そうした者として死んだとの偏見が語られる。「彼はすべての人間の友人および神の哲学者の憎しみと嫌悪にふさわしい。」(同、13)。

「哲学においては、われわれはスピノザが Kortholt、Brucker などと呼ばれたあだ名の時代は過ぎた。」Dornbusch, “frech gottlos, unsinnig, unverschämt, gotteslästerlich, pestilenziatisch, abscheulich”などのあだ名。「静穏な老いた賢者に関する前世紀、すなわちもっとも苦悩に満ちた争いの世紀の判断」は反復できない。

#### \* スピノザの生涯

「スピノザの生涯」に関する書物(Leben des Spinoza von Joh. Colerus, Frankf. 1733)は、「きわめて乾いたように、しかし歴史的正確性を伴って物語られている」(同、18)。

「傲慢な無神論者」ではなく「形而上学的・道徳的な夢想家(ein metaphysisch=moralischer Schwärmer)」としてのスピノザ(同、25)。

#### \* 「神の存在に感激したもの」としてのスピノザ

「すべての真理と存在は神の無限で永遠の存在から帰結する。」スピノザは「神の存在に感激したもの(ein Begeisterter fürs Dasein Gottes)」である(同、34)。

#### 文献

1. Pierre Bayle ; Écrits sur Spinoza ; publié avec le concours du Centre National des Lettres ; 1983 Berg International Editeurs, Paris. Textes choisis et présentés par Françoise Charles-Daubert et Pierre-François Moreau.
2. Pierre Bayle, Pensées sur l'athéisme, édition présentée, établie et annotée par Julie Boch, Paris 2004.
3. Pierre Bayle, De la tolérance, édité par Jean- Michel Gros , Paris 2014.
4. Pierre Bayle et la liberté de la conscience, ouvrage coordonné par Philippe Fréchet, Toulouse 2012.
5. Friedrich Heinrich Jacobi: Über die Lehre des Spinoza, 1785 in: Gesamtausgabe, hrsg. v. Klaus Hammcher und Walter Jaeschke, Bd . 1, Hamburg 1998.
6. Moses Mendelssohn, Morgenstunden oder Vorlesungen über das Dasein Gottes, in: Schriften über Religion und Aufklärung, hrsg. v. Martina Thomm, Darmstadt 1989.
7. Johann Gottfried Herder: Werke in zehn Bänden, hrsg. v. Martin Bollacher u.a., Bd.4.
8. Herder's Werke, 18. Teil, herausgegeben und mit Anmerkungen begleitet von Heirich Düntzer, Berlin, Gustav Hempel.

